出あいを求めて
――詩の授業の場合――

大田勝司

はじめに

出あいがその人の一生を決定づけることは少なくない。国語教室においても、どういう作品に出あうか、そこで何を感じとり、よみとるかで、以後の国語学習が往々にして決定される。しかし、一般に、国語の学習指導において、そういう出あいの重要性については認めながらも、そして出あいについての配慮はしながらも、総じて、なおざりにされがちであったのではなかろうか。

今回の試みは、そういった出あいの意味、特に、感動が軸となる詩の学習における出あいの意味を、高校二年生の詩の授業に例をとって、探ろうとしたものである。

（例としてとった高校二年生の授業は、「詩との出あい」と題する年間の最初の単元―昭和53年4月から6月にかけての計一四時間の授業―の記録をもととしたものである。）

一　出あいの意味

一口に出あいといっても、その内包する意味内容は、一様ではない。『動詞人間学』（作田啓一他著、昭和50年9月28日、講談社現代新書）の「あう」の項（橋本峰雄稿）によると、「あう」に、「合う」「相う」「嫁う」「会う」「遇う」「闘う」という語をあて、それぞれの意味あいを考察している。

①「あう」とはどういうことか。まず「あう」は「合う」である。物と物が合う、人と人が合うとは、同一化するということである。（一〇ページ）

②「あう」は「会う」であり「遇う」である。「遇う」とは偶然にあうことである。日本人には、「あう」ことにおける偶然性の意識がとくに強い。日本語の「あう」の基本はこの「遇う」であろう。「出あい」の偶然性への意識、およびそれへの驚きである。（一一ページ）

③「あう」はまた「闘う」である。意味の重い偶然を運命というが、運命とはたたかわねばならない。（一一ページ）

右の①～③の考察には得るものが大きい。確かに教育は、ある一定の目標、内容に基づいて、計画的に、必然性を求めて為されるものではあるが、一つ一つの授業は、起伏に富んだドラマ―意外性に満ちた営みでなければならない。そのように考えた場合、授業における出遇い―「出あい」の偶然性への意識、およびそれへの驚き―が当然要求されるし、また、その新鮮な驚きを媒介として、他者との同一化―他者としての言語作品に対する共感等が求められ、さら

には、意味の重い偶然（運命）とのたたきあいのなかで、自己の精神の変容がなされるべきであろう。

このような出あいの意味の重要性を十分認識し、検討したうえで、豊かな実りの多い国語教室を創造し、獲得していくことこそが、まさに一つの大きな課題といえるのではないだろうか。

二　事前調査から

1　調査目的

授業を構築する前に、生徒の受容の実態を明らかにしておかなければ、出あいの意味を問うことはできない。高校二年生ともなると、生徒は、それぞれ何らかの形で、詩という形態には触れてきているはずであるが、そのふれあいが、単なる接触、受動的なものに過ぎなかったものか、それとも、ほんとうの意味で出あいとなりえていたのか、自己の精神の一部としての意味をもってきたかどうかによって、以後の授業展開が左右されるからである。

2　調査題目

調査の題目は、「韻文（詩、短歌、俳句）との出あいとその享受」とし、具体的な作品名、作者名もあわせて記述させた。詩のみに限らず、「韻文との出あいとその享受」としたのは、詩というジャンルの位置づけをより明確にしたかったためである。

3　調査結果

ほぼ予測したとおりであった。つまり、授業のなかで、詩、短歌、俳句のそれぞれについて学習はしてきているが、それほど強く印象には残らなかった、また、授業外で、積極的にそれらについて鑑賞したり創作したりしているという姿勢はあまりみられないということである。ジャンル別にいえば、俳句よりも短歌、短歌よりも詩ということで、詩に対してより強く関心をもっていることがわかるが、それにしても、出あいというほどのものではない。

以下、特に詩に関して、その調査結果についてもう少し詳しく紹介しておきたい。まず、詩に対してあまりなじめないという点は、次のようなものである。

- 一つ一つのことばはむずかしくないが、全体の意図がとらえにくい。
- まわりくどい表現がしてあるのでとけこんでいけない。
- なにげないことばの背後にある心情がつかみにくい。
- 深く考えようとすればするほどわかりにくくなり、とらえどころがない。
- 情景、心情をことばで言いあらわすことがむずかしい。

次に、詩の親しみやすさ、よさという点では、次のようなものがあげられた。

- 心情的に共鳴できる点がある。
- 音楽的なリズムに快さを感じる。
- 短いわりには印象が強く、心に残りやすい。
- むだのなさがよい。
- 素朴で純粋なものには感動する。
- 読むと心が安まるものはよい。

また、印象に残っている詩人、詩作品としては、高村光太郎の詩、特に「道程」が多かったが、ほかには、三好達治、中原中也、

ヘッセなどを三人程度あげているだけで、特筆すべきものはない。

これらの点から考えると、やはり詩という独特の表現形式に対する抵抗のほうが強く、その美しさ、すばらしさを感得できた、つまり、出あいがそこであったとはあまり考えられない。その意味で、以下の授業の展開としては、生徒の詩に対する拒否的反応をいかに和らげ、ほんとうの意味での出あいをさせるか、またどのようにしてそのきっかけをつかませるかということが主要なことがらになった。

三　「詩人との出会いと別れ」教材論

使用教科書「現代国語二新修版」（明治書院）の詩単元は次のように構成されている。

3　詩

秋の祈り……高村光太郎
竹……萩原朔太郎
小景異情……室生　犀星
犬吠岬旅情のうた……佐藤　春夫
旅程幻想（作品第三五六番）……宮沢　賢治
詩人との出会いと別れ……高橋　和巳

最初の五作品はいずれも詩作品であるが、最後の「詩人との出会いと別れ」（高橋和巳）は評論である。一般に、ジャンル単元としての詩単元の構成は、詩作品のみか、詩作品プラス詩の鑑賞の仕方、味わい方といった類の文章が載せられているかである。その意味では、この「詩人との出会いと別れ」は異質である。もちろん、筆者高橋和巳なりの詩の鑑賞は含まれているのであるが、そこに重点があるのではなく、三好達治という詩人にいかに出会い、訣別したかという自己と詩との精神的なかかわりかたに中心がおかれている。

華々しく、美しく、しかも不安な道――。そこには、何物にも代替し得ない、しかも無償の激昂があり、しかも徹底的な徒労の人生に人を誘い込みそうな叙情があった。言葉のわずかな連なりとリズムがなぜ、人に全く別な世界へのイメージを喚起するのか。それはいまだに解けそうにない謎ではあるけれども、そのときに感じた不安な感情のたかぶりが、恐らくわたしの文学体験の最初に属する。

右の一節は、三好達治「乳母車」に出あった時の高橋和巳の感慨であるが、詩に対する生徒の異和感を考慮に入れた場合、人生の過程において、詩というものが果たす大きな役割をまざまざとみせてくれるこのような教材は、決して無意味なものではなかろう。

生徒にとって、この教材に触発され、自分なりの詩との出あいを模索していくことができるなら、それなりの効果をもったといえる。ただし、この教材の場合、右の一節にもその一端がうかがわれるように、かなり観念的な論調であって、あらかじめ自分なりの詩観をなんらかの形でもっている生徒であればいざしらず、事前調査にあらわれたような意識の段階の生徒にとっては、その観念の世界そのものに対して難渋するであろうとの危惧がもたれる。事実、授業としてこの教材を扱った際は、文章内容の把握に手間取り、内面的な啓発にまでは至らなかった。もちろん、私自身の授業方法の問

題もあろうが、積極的に詩を受けとめていこうとするその第一歩にあるといってもいい生徒を対象にした場合、この教材と同じ質の高さはもちながらも、もっと平易な詩との出あい論が選択されるべきだと考える。

その意味では、たとえば、『詩への架橋』（大岡信著、昭和52年6月10日、岩波新書）にみられる詩との出あいのありさまは、教材として十分な価値があると考えられる。特に「空間」（草野心平）、「祈り」（中原中也）に対する著者の受けとめかたは、詩のすばらしさを感得させてくれる（同上書、九八～一〇一ページ参照）。また、『言葉なき歌』（中村稔著、昭和48年1月10日、角川書店）では、中原中也との出あいが語られ、特に冒頭の「春日幻想」に出あった時の文章は印象深い。

これらの出あい論は、生徒たちにとって大きな感動を与え、また自己の詩との出あいを形成するのに果たす役割が大きいものと思われる。そういった意味で、これらの教材群を発掘していくのも必要なことではなかろうか。

四　教材としての詩作品

詩との出あいが成立するためには、やはり何といっても、詩作品そのものをどのように味わい、そこから自分自身の精神のありかたとどのようにかかわらせていくかということによって決定される面が大きいであろう。その意味では、一編の詩作品を十分に鑑賞させるという手立てがまず考えられる。

このことについては、すでにさまざまな実践がなされ、みごとな成果をあげていて、枚挙のいとまがない。なかでも、『中学高校現代詩の授業』（足立悦男著、昭和53年11月10日、文化評論出版）においては、戦後の現代詩を教材化し、生徒の詩への関心・興味を掘り起こした意欲的な試みにちりばめられている。

このように、一編の詩を深く掘りさげ、一つ一つのことばに対決していき、それをクラス全員に浸透させていくという方法も意味あることであるが、生徒一人一人に個性があるという教室の実態を考えた場合、さまざまな傾向をもった作品群を与えるという方法も考えられる。新鮮な驚き、最初の出あいを大切にするならば、生徒にとって、ある程度選択の余地が与えられるほうが好ましいともいえる。その場合、どういう作品群を教材として準備するかが重要なポイントとなるが、今回の授業では、過去の実践のなかで、生徒たちが感銘をし、詩との出あいがあったと考えられる作品を中心に構成してみた。

先にあげた使用教科書の場合は、大正期の詩を掲げているわけであるが、事前調査から今一つ生徒の内面に肉薄するには不十分だと考え、自主教材を選んだわけである。

次にその作品をあげる（紙面の関係上、題目と詩人名のみ掲げる）。

初恋……島崎　藤村
地面の底の病気の顔……萩原朔太郎
野原に寝る……萩原朔太郎
草に寝て……立原　道造
皎皎とのぼってゆきたい……八木　重吉

人形……八木　重吉
自然に、充分自然に……伊東　静雄
崖……石垣　りん
はる……谷川俊太郎
もし言葉が……谷川俊太郎
兵士の告白……谷川俊太郎

五　深まりを求めて

教材としての詩作品を選択することは、詩との出あいを考えた場合に、非常に重要な意味をもつ。出あいを成立させるためには、まず最初の段階において何らかの問題意識、学習意欲をもたせることが必要だからである。その意味で、最初の出あいを大切にしたい。そして、その最初の出あいで、すべてを見透すこと、すなわち詩の世界のなかに自分自身を投影できる生徒も中にはいる。しかし、一般に、最初の段階では、何らかの感動がおこったにしても、自己の精神とかかわりあわせて詩を受けとめることはむずかしい。そこで、最初の出あいをどのように展開させ、どのように深めていくかが大きな課題となる。

今回の授業では、次のような展開をとった。

〈1〉

プリントの11編の詩のなかから、心に鋭くせまってきた詩、心をゆさぶった詩を一編選び、その詩を朗読するとともに、印象を発表する。

〈2〉

〈1〉の感想をプリントにし、発表者自身の訂正・補足を加えたうえで、プリントの感想に対して、他の者の質疑・意見・感想を発表する。

感想プリントは次のとおりである（感想発表者は、計19名で、一編の詩について二名以上とりあげたものが多いが、ここでは、各一名の感想を掲げる。なお、この感想プリントは、口頭でなされたものを授業者が文字化したものである）。

「初恋」島崎藤村

○高一『徒然草研究』での批判（北川冬彦「詩の話」）に対する反発
○明治時代の情緒が感じられる
○リズムがきれいだ

「地面の底の病気の顔」萩原朔太郎

○初めは島崎藤村の詩にひかれていたが（ロマンチックなもの）、あとになって萩原朔太郎の詩にひかれるようになった
○病的な官能（生理的病的な感情）がみられる
○「あらはれ」「萌えそめ」など中途半端なとめ方（断定ではない）がされ、気持ちの悪さを増幅している
○「うらうら草」「ねずみ」などのことばの使い方からも気持ちの悪さを感じさせる

「草に寝て……」立原道造

○草にねころんで広い感じをいだかせる
○美しい感じ
○最初は一人の感じだったが、「私たち」ということばの使われ

方がおもしろい
○この詩からは春という感じを受けるのに、「六月の或る日曜日に」からは梅雨を想像する
「皎皎とのぼってゆきたい」八木重吉
○「皎皎と」ということばが強く印象に残った（白く、清らかで、無心な感じ）
○すみわたった日という感じが目の前にうかんでくるようだ
○最後の問いかけが自分をそのような気持ちにさせる
「人形」八木重吉
○中一の妹がいつも朗読していたので八木重吉の詩が印象的だった
○中学校で習った「奈々子に」（吉野弘）に感じが似ている—どちらも父親の愛情が出ている（「奈々子」ほど直接的にではないが、愛情がよくあらわれている）
「自然に、充分自然に」伊東静雄
○「自然にかたへの枝をえらんだ」「らくらくと仰けにね転んだ」などが非常に残酷な感じを与える
○子供の無邪気な目でみているので、強く記憶に残る
○「奇妙につよく空を蹴り」「礫のやうにそれが地上に落ちるのを」の表現は何かよくわからないが気に入った
「崖」石垣りん
○のしかかってくるような感じ
○四連に深い意味がある（特に最初の二行）
○追いつめられたものからのがれようとして飛びこんだのにのがれられない
「はる」谷川俊太郎
○「はな」（ピンク色の花）「くも」（白）「そら」（青）という色あいが感じられ、それらをこえていくことによって、空間（奥行き）が感じられる
○「かみさまとしずかなはなしをした」というところから、悲しいこと、楽しいことの話ができたという感じで、夢があっていい
「もし言葉が」谷川俊太郎
○吉田拓郎の詞（ことばを使って攻撃的）の感じ—批判的なものから出発している
○ことばの弱さ、おそろしさを知っていて、その使い方のむずかしさを感じさせる
「兵士の告白」谷川俊太郎
○なまなましく、どぎつい
○戦争映画の一シーンがうかびあがってくる
○カタカナ—変わった感じ
○戦争の悲惨さを静かに訴えている
○単なる反戦詩ではなく、人間について考えさせられる—殺される兵士の気持ちはどうなのだろうかという気にさせる
○最後の二行にひっかかった
○気持ちが悪い—特に一連の最後の二行
○谷川俊太郎のこれまでの活躍を聞いていたのとは別の感じを受ける

第一印象のこの段階では、かなり深く詩の世界に入っているものもいるが、全般に、表面的な受けとりかたが多く、また断片的な印象が目立つ。解釈上の問題もみられる。そこで、クラス全体からの質疑・意見・感想を加えることによって、詩を全体として受けとめさせようとしたわけである。

〈3〉

クラス全体の討議をふまえ、問題点をもっと鮮明にし、詩をより深く味わうために、グループ討議をする。なお、その際、プリントの詩作品について、過去の実践のなかで出されたレポートの一部をプリントにして配布するとともに、「崖」（石垣りん）についての茨木のり子の文章「美しいことばとは」（「現代国語1」筑摩書房所収）、「初恋」（島崎藤村）「自然に、充分自然に」（伊東静雄）についての村野四郎の文章「新体詩と現代詩―詩における音楽性の問題」（「国語展望32」尚学図書所収）のそれぞれ一部をコピーし参考資料として配布した。

過去の事例プリントは次のとおりである（プリントには9名分のレポートを載せたが、ここでは二編のみを掲げる）。

「皎皎とのぼってゆきたい」「人形」八木重吉

八木重吉、また彼の詩についてほとんど何も知らないままに彼を対象として選んだ私だが、彼を知れば知るほど、作品を読めば読むほど彼独自の世界にひき込まれるのを感じている。彼の詩のどれを読んでも深く感銘を受けてしまう。

独特の非常に短い詩の中に、というよりひとつひとつの選びぬかれた言葉の中に濃縮された彼の意識が世界が満ちあふれていて、彼の一挙一動が伝わってくるような気にさえなってしまう。透明な魅力とでも言うのだろうか。

少しほめすぎの感があるようだ。今の私は彼に傾倒しきっているらしい。

（中略）

小レポートでも述べたが、私が初めて彼の詩に接したのは「皎皎とのぼってゆきたい」であった。そのとき、この詩は何やらこころにずしんと重く響いた。次に読んだのは「人形」。今度は何やらあたたかいものを感じた。私にまでほのぼのした気分が伝わってきた。

そして今、こうしてあらためて彼の作品に正面からとりくんでみると、今までみのがしていたあたたかさと背中あわせの悲哀に気づいた。そして彼の詩のあたたかみは悲哀の中から生まれでるものであるということも。自分自身悲哀の中をさまよい歩きながら他のものに対しては限りない愛情を持って接する……その中のあたたかみが、悲哀が彼の詩ににじみ出ている。（高三女）

「崖」石垣りん

普段詩集などめったに読まないせいもあって、これまでの私は石垣りんという女流詩人に対して、ほとんど何の知識も持っていなかった。しかし現国のプリントで出会ったこの〝崖〟という詩―とくにその終わりの二行―は、私に新鮮な驚きを与えてくれた。あの　女。そこでポツリと詩が途切れる。そのあとから作者のため息が聞こえてくるような気がして、思わず背筋をブルッと震わせた。そのため息は十五年前と同じ、疲れきった、心の底か

らのため息なのだ。

〝崖〟を読んでから、急に石垣りんの書いたものが読みたくなった。詩集を読み、また、エッセイ集『ユーモアの鎖国』を読んで私の知ったことは、彼女の詩は生活の中から自ずと生まれ出てくるものである、ということだった。生活に密着した詩、生活をよく知っているもののやさしい語りかけ…私は彼女に、まるで、自分のおばあさんに対するような敬愛の念を持つことができた。しかし同時に彼女は厳しい、しっかりしたおばあさんでもある。その物を見る目は適確で、しかも鋭い。そして、思ったことを、飾り気のない言葉ではっきり言ってのける小気味の良さも持っている。要するに彼女の詩は、難解でもなく、甘ったるくもなく、卒直で親近感の持てる詩なのである。

さて、〝崖〟の詩の最後の「女」という一文字は私にとって全くショッキングだった。戦争と、女。青春を失った、私たちの父母の時代。追いつめられた女たちに残された、崖という、ゆき場のない場所――。

（中略）

初め私は、〝崖〟は戦争告発の詩だと思っていたのだが、石垣りんが戦争について書いたものを読んでいくうちに、少しずつ考えが変わった。冒頭に「戦争」という言葉が登場しはするけれど、女が「美徳や義理やら体裁やら」に追いつめられていたのは戦時中だけだろうか。確かに戦争の終わり、サイパンの女たちは崖からとびこまざるを得なかった。しかし現代においても、崖はやはり存在しているのだと私は思う。

（中略）

石垣りんという詩人について、何の知識も持たなかった私が、〝崖〟を読んで彼女の考え方に触れ、彼女の詩集から彼女の人生をも知るようになり……。今まで小説の世界にしか興味を持っていなかった私は、詩のすばらしさや不思議さに初めて出会い、目を見開く思いです。石垣りんは私にとって、忘れられない詩人になりそうです。

（高二女）

――いずれも、みごとな詩との出あいがなされた例だと思う。特に、例としてあげた石垣りん「崖」についてレポートした生徒は、一編の詩と出あうことによって、自らの精神の変容を為しながら、主体的に詩の世界を自分のものとしている。授業では、近代詩の特質を理解させるために現代詩のいくつかの作品をプリントにして配布し、その現代詩の一部としての「崖」であって、あくまでも参考資料としての意味が強かったのだが、彼女の場合は、授業の枠・意図をはるかに乗り越え、自ら進んで、授業外で石垣りん詩人論にまで進み、課題としてのレポート以外に、「崖と海と女と―石垣りんの詩」と題する追加レポートを提出してくれた。このことは、授業者にとって望外の喜びであった。

今回の授業において、生徒たちがこれらの出あいに学ぶものがある、「詩人との出会いと別れ」教材論で述べたように、一つの出あいに触発されて自らの出あいが成立するのではないかと考えてプリント化した。そして、授業時間内においては、ほんとうの意味での出あいができなくとも、そのきっかけがつかめればいいのではないかと思う。教育という営為は、結果を性急に求めるべきものではな

いと思う。重要なのは、生徒の目をどこに向けるかである。

〈4〉

グループ討議の結果を各グループごとに発表し、相互の考えかた・とらえかたの違いなどを明らかにするとともに、解釈の誤り、詩の歴史、詩の基本的な鑑賞のしかたなどにもふれていき、各作品ごとのまとめをした。

〈5〉

終わりに、各作品を朗読し、「今回の授業を通じて詩に対する見方にどのような変化が生まれてきたか」という題目でレポートを課した。

六　事後調査から

詩の単元の最後に課したレポートからは、学ぶべきものが多い。次にそのいくつかの例をあげる。いずれも原文のままであるが、一部だけを載せているものもある。

A　もともと私は詩集などというものを熱心に読む方ではないし、本屋に行っても、買うのはほとんど小説で詩集なんかめったに買わない。そんなだから、本当に私にあったというか詩の中で一体になれるような、この人の詩を読んでみたいと思うようなそういう詩人も、今だに見つけられないでいるような気がする。それは、今回の詩についてやった数時間の授業を終えてもそのままで、今回題材にしたいの詩の中で、私は「はる」という詩を選んだのだが、それも最初ぱっと読んで、なんとなく好きだったからなのだ。

授業で、詩についてやれば、もちろんその詩に対する見方も変わってくる。つまり、詩の中の一語一句について、その語句が詩全体にもたらす効果や詩の構成などについて意識的に考えるようになる。そうすることによって、その詩をより深く理解することができるだろうし、作者の偉大さを発見することもできるのだろうと思う。ただ、これから先、自分で詩集を手にして読む時、その詩集の中の詩の構成とか細かい表現とかについて、一つ一つ意識して考えながら読むかどうかというと、少なくとも私にはそんなことはできないだろうと思う。詩を読むというのは極端にいうと、もちろんその詩がわからないとどうしようもないが、深く理解することよりも、感じることなのではないかと思っている。（国語の勉強ではそうもいかないのかもしれないけれど。）だから、今回の詩の授業で、詩に見られる効果的な文章表現や構成について勉強することができたが、これから先、授業以外の場で、詩を読む時には、やはり、私は feeling で読んでしまうだろうと思う。

私は詩をたくさん読んでいるわけでもないし、詩の読み方というのはもっと他にあるのかもしれない。私はまだこの人の詩を読んでみたいと思うような詩人に出会った覚えがないし、今回プリントされたいくつかの詩の中にも、これだ！というのが見あたらなかったし、ようするに、まだ、いわゆる「詩人との出会い」というものを経験していない。果たして、そういう詩人を見つけることができるのかどうか、ふと、不安になるのだが、これから先、なんとかして、詩の世界で一体になれるような詩人と出会う

ことができたらすばらしいことだと思うし、その時はその詩人に没頭してみたいと思う。

B　授業で「詩」について学んだ後、何も残らなかったと云えば嘘になる。かと云って、感銘を受けたと云う事もない。

僕には、いつ頃からか、詩に恐する恐怖感がある。それは、テストによって植え付けられたものであると云っても過言ではない。僕は、詩は読み手によって、受け取り方は違っていても良いと思う。いや、そうあるべきだと思う。しかし、中学生時代の模試などで、そんな〝幅〟を持たせたものがあったであろうか。又、同じ問題でも本に依って答えが違うことがよくあるのは何故であろうか。このことが、詩に対する不信感を募らせた。この頃、『海潮音』の「山のあなた」や、プリントにも載っている「草に寝て」も、テストに出ていた為、嫌いになってしまった。

この恐怖心も、今度の授業を経て、いくらか薄らいだように思う。これは一つの収穫だったと思っている。又、授業で丁寧にやって頂き、詩は読めば読むほど味わいが深まるのだと云う事を今更知って驚いてしまった。たぶん無理だとは思うが、これを機会に少しでも詩に興味がわけば……と思っている。（男、一部）

C　めったに詩なんか読まない私にとって詩は大きな負担になった。詩というものを決して嫌いではなかったが、読解に手間がかかることが疎遠なものにしてしまった理由だ。

そうである。詩では人によって、いや同一人物でも時と場合によっては一つの物に対するとらえ方が違っている。それはがん固な頭をもつ私には我慢できないのだ。

しかしこの詩の授業を終えた今、多種類のとらえ方ができることは何ってすばらしいのだろうと思うようになった。

授業中他の人の発言を聴いていると、ある人は「私もこの詩を読んでいるとすがすがしい気持ちになる。」と言うのに、その同じ詩に対して他の人は「私は三連は非常に陰鬱に感じる。作者の気持ちもやはり沈んでいるのだろう。」と言う、そして私も、彼ら二人以外の意見をもち、対立させ、より確かな考えを確立する。

その過程では他では得られないような頭の体操が出来る。自分の考えがだんだん太くなっていくかと思えば、枝分かれしたり、横にそれたりしたり、時にはまた初めからやり直し、他の道を歩んでいたりする。また他人の発言を聴くことは、まるでその人の個性が暴露するのを盗み聞きしているような興味に変わる。一篇の詩をもって、私たちは心を通わせ合うこともできれば、自己を磨くこともできる。全く詩は「物を言わぬ師」である。

また詩を読んでいて、特に気が付いたのは、リズムの重要性である。リズムは単に雰囲気を形成したり、まとまりをよくするものではない。リズムと言葉が詩の二大元素だと言っても過言ではないだろう。「リズムが意志を伝えるか?」—これには最初、大きな疑問があった。いやほとんど不可能だと思っていた。しかし、イメージとイメージの関係で成立したリズムで立派に作者の心中を表わしていることが何回も読むうちにわかってきた。

詩は文学の中で最も文学らしいものだと思う。なぜなら一篇の詩の中には大自然がそのまま入っていたり、作者の人生が入って

いたり、人類へのメッセージが入っていたりするからだ。私は今までおざなりにしてきた詩との接触をもっと大切にして、この偉大なる文学作品〝詩〟でもって、人生、ものの見方を学びたい。

（男）

D　普通の文章においても、私は、文章を深く読むという事は得意ではない。だから、まれに読む機会がある詩などは、最初に読んだ印象というものが、最後まで残り、他の方面からその詩を見ようとしなかった。今回の「草に寝て……六月の或る日曜日に」立原道造の場合も、例外ではなかった。プリントを渡されて、この詩を初めて読んだ時、（授業の時にも、言ったが……。）〝しあわせは、どこにある？〟という文字が、一文がものすごく大きく見え、私の目に飛びこんで来た。すべて同じ大きさの活字で書かれているはずなのに、どでかく見えたのである。ちょうど、太陽を見た時のように、とても、まぶしく感じられ、胸に突き刺さるような感じがした。これは、きっと、その時の私の心の状態というものが不安定だっただからだろう。私は、自分が、心の中でうやむやにすましてしまおうとしていた（触れたくないとさけていた）部分を、釘でも、打ち込まれた様に強い衝撃を受けた。本当に、〝しあわせ〟とは何なのだろうかと、しばらくは、その言葉が、頭の中を駆けめぐっていた。ただ詩の内容など考えずにその言葉ばかり反復していた。それほど、キョーレッだったのである。だから、私は、立原道造も、この詩を書いた時、昔の楽しくしあわせな生活を思い出し、今の不安定な自分の生活とを比較し、昔をうらやみ、そして、〝しあわせ〟というものを考え直していたのではないかと思っていた。最初の印象で詩を読んでしまう私には、そうとしか思えなかったのである。しかし、先輩の感想文を読むと、全く逆であった。何もかもが、逆に考えられているのである。〝同じ幸せを味わった人がここにもいた。〟と書いてある。私は、むしろ〝同じ苦しみを味わった人が……〟と書きたいのに。そのため、重要視する部分も当然違う。それにしても、こうも、違う見方が、できるものなのだろうか。やはり読み手の気持ちの持ち方の違いだろう。この感想文を読んだ時ものすごくこの人がうらやましく思えた。そして、私もこんな風に、詩が読めるようになりたいと思った。

どうやら今、この詩を読み返してみると素直にしあわせな詩だと受け入れる事ができるようになった。たいした進歩でも何かもしれないが、詩というものは、その時その時の読み手の気持ちの持ち方によってさまざまな見方ができるという事がわかった。

（女）

E　ぼくは、前から、現国の授業の中では、詩の授業が一番好きであった。それは、まず、文章が簡潔で短いということである。そういうことで、接しやすいと思う。もう一つは、中学校にはいってすぐ詩の授業で、またその時、グループ学習をしたからである。グループ学習というのは、一人一人が真剣に考えるので、よく頭にはいり、よいと思う。そういうわけで、詩というものが好きになった。今回の詩についての授業をするまでは、前に言ったように、楽しいもの、おもしろいものとしか思わなかった。しかし、今回の授業によって、詩を何度も何度も読み返し、何度も何度も

考えさせられた、自分にとって大変充実した授業であったと思う。その原因はどこにあるのだろう？考えてみると、まず最初に、自分の好きな詩を一つ選んで、それについて考えたということであろう。無理やり押しつけられるのではなく、自分の好きなものについて考えるということは、大変やりやすく、また、やる気もでてくると思う。その次の理由としては、自分が発表したということであろう。先生にあてられ、自分で詩を読み、その詩に対する意見を述べた。そして、その意見をプリントに載せてもらった。それによって、やる気が起こった。そしてまた、それぞれの感想に対する質問、意見で、ぼくに対するものがわりとあった。普通なら、うまくは答えられないのであろうが、前に述べたようなわけで、今回は、はっきりと自分の意見を述べることができるようになった。そのようなわけで、今回の授業によって、ぼくの詩に対する見方、考え方というものは、たいへんかわったと思う。どういうところかといわれても、はっきりとはわからないが、詩に対する考えというものが一歩大人になったような気がする。だから、今回の授業はたいへんためになった。（男）

F　最初に私は詩が好きだと確か書いたはずだが、今、こうして詩の学習を終わってみて、やはり、詩を学んでよかった、と思っている。

特に大きな収穫は萩原朔太郎の詩の新たな側面を発見したことである。私は彼の詩に、何か異様な素晴らしさを漠然とは感じていたのだが、今度「月に吠える」の「地の底の病気の顔」を初めて「深く」分析してみて、いろいろなことがわかったような気がする。たとえば、彼の詩は全体のイメージをとても重要視しており、個々のことばのかもし出すイメージの集合体から成っているということや、更に、一般に彼の詩は官能的、退廃的、病的といった言葉で形容されるのだが、単にそれらの言葉で形容されるだけの内容ではなくて、もっと奥の深い空間を形成していることを発見したことなどである。私は今から少し萩原朔太郎の詩集「月に吠える」をもう一度しっかり読んでみようと思っている。こう思うようになったのも今度の学習のおかげといえるかもしれない。

私は今まで詩というとロマンチックなものと、すぐ連想していたものである。それは私がやたらとリリシズムあふれたロマン的な詩ばかり読んでいたからであるが、今度の学習で、少しなりとも詩の違う面に触れたような気がする。それは何かと言えば、詩の持つ言語空間と言おうか、感情とか、リズムとかいった表面的なものではなくて、もっと詩自体の持つ内面的なものが、重要な役割をしていることを発見したことである。（男、一部）

全般的には、B・C・Dのレポートにみられるように、詩に対して少し考え方が変化してきたというのが圧倒的であった。だが、Aのレポートのように、全くといっていいほど変わらなかったものもかなり見受けられた。これには、さまざまな理由が考えられるが、その一つとしては、Aのレポートのように、自分にぴったりした作品がなかったとか、ほかに、詩という形態・形式になじめない、詩のよさがいまだによくわからないとかいったことで、詩が自己の精神生活の一部としての意味をもちえないという思いがそのまま残っ

ている。

また、B・C・Dのように、少し変化したものについても、詩の世界に対して魅力を感じながらも、とまどいをみせている。しかし、これらについては、これから一つのきっかけによって大きく変化をみせることは期待できる。Bはまだ詩の世界の戸口にいるが、C・Dについては、詩の世界のかなり深くまで入りこんでいるとみられる。こういった一つの変化をみせてきた生徒の今後の指導が非常に大切である。

E・Fのように、ある程度詩の世界に踏みこんで詩を全体として受けとめているものはそんなに多くはない。特徴としては、それまでに、自分なりの詩の鑑賞をしてきたという蓄積があるということがいえ、教育の成果の重要性を感じさせる。特に、出あいという観点からは、なるべく早い時期にそのきっかけをつかませることが大切だからである。

おわりに

総じて、というように、総括的に結論づけることは危険である。詩との出あいを成立させようと試みたことが果たして成果として実ったかどうかは、やはり、今後の各生徒の歩みをみなければなるまい。ただ、出あいのその一歩を何らかの形で今回の授業で成しえたとはいえるのではないかと思う。十時間余りの時間を使って生徒たちの人生の岐路を左右することは無理だともいえるが、少なくとも出あいを求めて授業を構築する必要はあると考えられる。特に、Bのレポートにみられるように、出あいの反対の極としての授業を生徒が受けてきたとしたら、国語の学習指導の意味そのものが問われなければならないと思える。

（滋賀大学教育学部講師）